

・ 鏑木清方 幻の三部作《築地明石町》特別公開

東京国立近代美術館 2019. 11. 01～12. 15

かぶらぎきよかた
「鏑木清方」(1878～1972) は、東京・神田生まれの挿絵画家として画業をスタートさせ、美人画で「上村松園」と並び称された日本有数の画家で、文学的な教養と清新な感覚で情緒豊かな明治の「風俗画」や「人物画」を描いている。

当館では、画伯の代表作品として知られながら 1975 (昭和 50) 年以来“所在不明”であった《築地明石町》と、合わせて三部作となる《新富町》《浜町河岸》の 3 点を新しく収蔵したため、これを記念して三作品のお披露目と所蔵の画伯の作品を合わせた「特別展」を開催している。今回の展覧会では、合わせて重要文化財《三遊亭円朝像》や 12 幅対の《明治風俗十二か月》など、粒よりの名作が並ぶという誠に贅沢な展示会であるため興味津々であるとの評判である。

《築地明石町》 1927 (昭和 2) 年 絹本着色 一幅



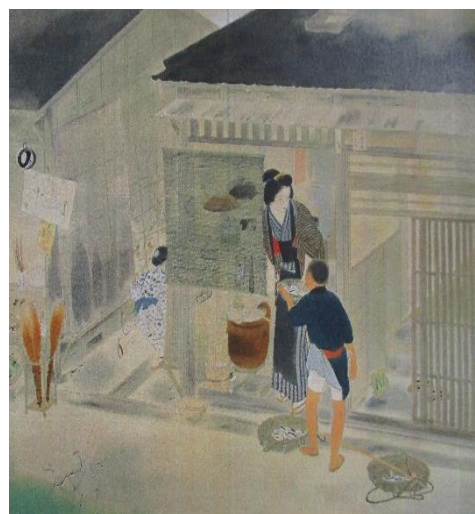
作品のタイトルが象徴的で、「築地」はその名のとおり外国人居留地のある「明石町」のそばは、帆船が連なり威勢のよい鰯売りの少年たちや、新聞配達夫が走る下町の風景が数多く描かれている。本作は、清方の代表作で、当時、中流階級に流行した黒の羽織の袖を胸高に打ち合わせて立つ姿で、抜けるような白い肌に実に鮮やかな美しさがある。季節外れの朝顔は枯れ始め、秋風に思わず袖を寄せているスラリと描かれた見返り美人作は、高く評価され画壇での揺るぎない作品になっている。



《新富町》



《浜町河岸》



《いわし》 絹本彩色